地域を元気にする仕組みや人のつながりをデザインする力を育成

東北芸術工科大学 デザイン工学部 コミュニティデザイン学科

山形市役所の若手職員と協働し、未来シミュレーションゲームを実施

「デザイン思考演習」では市役所の課長になりきり、限りある税金をどの政策に使うかを考えました。政策を考える際にクリエイティビティが必要なことに気づいたり、行政職員の日々の苦労を実感したりしました。（中川さん）

地域住民と同じ目線での語り合いで、自分の発想を試し、高められます

シェアハウスの創業準備をしている地域団体に「地域留学」した際、団体のロゴをデザインしました。団体の結束力を高められるよう、地域の魅力やメンバーの想いを込めて制作することで、チームづくりに貢献できたと思います。（本間さん）

メンバーの長所を生かし、プロジェクトを前進

私が所属する地域プロジェクトは、6人チームで進行します。自然と役割分担が生まれ、私は場の雰囲気づくりや話し合いの進行役が得意だと気づきました。（中川さん）

地域の問題解決に必要な力を身につける

山形県にある東北芸術工科大学（＊1）デザイン工学部コミュニティデザイン学科では、地域を持続させる仕組みやコミュニティをつくる人材を育てている。

同学科では、「デザイン思考」（＊2）の手法を用いて、課題発見能力と解決能力を身につけるだけではなく、人と人とを結び、問題解決に立ち向かう人材や、コミュニティを育成する力が必要であると捉えている。こうした力を、1年次から徹底しアクティブ・ラーニングを通して育成している。

「コミュニティデザイン演習」で

デザイン工学部
コミュニティデザイン学科3年
中川繁輝
なかがわ・しげき
東京都立千早（ちはや）高校卒業。同学科のイベント参加がきっかけとなり、入学。

デザイン工学部
コミュニティデザイン学科3年
本間真生
ほんま・まさき
新潟県立新発田（しばた）商業高校卒業。同学科のスタジオ活動にひかれて、入学。

＊1 芸術学部とデザイン工学部の2学部が設置されている。芸術とデザインの力で社会問題を解決できる人材の育成を使命としている。
＊2 ①共感、②問題定義、③創造、④プロトタイプ（試作品）、⑤テストという順序で思考を深め、イノベーションを実現させる問題発見・問題解決の方法論。アメリカの世界的コンサルティング会社 IDEO によって提唱され、世界を先導する数々の企業に取り入れられている。

は、コミュニティ形成に必要な基礎的な知識や技術を学ぶ。3年生の本間真生さんは、こう振り返る。

「まちづくりの基本は、住民の声を聞いて課題の本質を明確にすることです。授業では、住民へのヒアリングの場を想定し、役割を決めてロールプレーイングを行い、話し合いの手法や進め方を学びました」

一方、「デザイン思考演習」は、製品デザインの過程を応用して、解決策を見出だす手法を学ぶ科目だ。3年生の中川繁輝さんはこう語る。

「身近な問題を解決する演習として、スケジュール帳のデザインをしました。実際に地域に入り、まちづくりを実践する中で、製品でも地域でも、問題解決のためのデザインをするプロセスは同じだということを強く実感しました」

1年次から地域にかかわり問題解決に取り組む

地域の中で実践的な学びを展開する点も、同学科の大きな特色の1つだ。1年次の春季休業には、全学生が約1か月間の「地域留学」を体験。学生は、希望する地域に入り、問題を解決する手法を学ぶ。

「地域活性化を目的としたシェアハウスの運営方針やルールづくりに携わりました。シェアハウスの住民の心地よさだけでなく、周辺住民への影響やまちの将来像を踏まえて話し合うことで、シェアハウスは地域にあり続けてほしいものになったと思います」（本間さん）

2年次は、学科の教員がそれぞれ設定した「スタジオ」と呼ばれる地域プロジェクトの中から関心のあるものを選び、所属する。3年次前期までの1年半、じっくり地域に入って、問題解決の実践に取り組む。

中川さんは、西山形コミュニティセンターの依頼で、若者の転出について調査・対策を検討している。

「調査を進めるうちに、若年層と高齢者層の考え方に隔たりがあると気づきました。現在、各世代を集めたワークショップを実施するなど、互いを理解しあい、住民が一丸となれる方法を模索しています」

本間さんは、山形県大江町から委託され、銀行だった建物を地域住民の交流施設にリニューアルさせるプロジェクトにかかわった。

「私たちの代では、リニューアルした交流施設で活動してくれる人材を育成しました。対象は子育てママにし、彼女たちが本気でやってみたいことを発見し、実施するまでをサポートしました。学科で学んだアイデア発想法やプロセスデザインを地域の人たちに身につけてもらうことで、継続してチャレンジしていける人材を生み出しました」（本間さん）

集大成の卒業研究は、個別にコミュニティデザインを実践

スタジオ活動と並行し、講義や演習でコミュニティ形成の知識を深めたり、地域課題の取り組み事例を学んだりすることで、理論と実践を往復し、学びを深化させていく。

「スタジオ活動を通して、私は論理的に説明する力が弱いと痛感し、現在、『ロジカルライティング』を履修しています」（本間さん）

そうした学習や体験を基に、3年次後期からの卒業研究では、個別に地域に入り、自ら設定した課題に取り組んで、その成果をまとめたプレゼンテーションを行う。

「閉村などが増えている状況下で、いかに前向きな気持ちでコミュニティを閉じるかという手法も研究したいと考えています」（中川さん）

大学の思い

手法を知り、人を動かせるコミュニティデザイナーに

デザイン工学部
コミュニティデザイン学科
学科長
岡崎エミ
おかざき・えみ

住民自らが地域の問題を解決することが求められる時代になりました。そうした地域の活動を支えるのが、本学科が輩出するコミュニティデザイナーです。

コミュニティをデザインするためには、問題解決の事例や手法を知るだけではなく、住民のモチベーションに働きかけたり、住民同士をつなげたりと、人へのアプローチが欠かせません。その両面を理論と実践から深く学べるのが、大きな特徴です。

また、人を動かすには、論理の正しさだけでは不十分で、本間さんのように活動団体のロゴをデザインするなど、感性で地域の方の心を揺さぶることも大切です。

そのため本学科では、グラフィックデザインや冊子編集も必修科目に設定しています。芸術大学という環境も大きなメリットです。

卒業後は、起業する者から、行政、教育、デザイン、福祉、組織開発などを通して地域課題に取り組む者まで様々です。多くの分野で、本学科で学んだ力が生かされています。